

「子ども達をわたしのところに来させなさい」
(新約聖書 マルコによる福音書 10章 14節より・・・4月の聖句)

「さあ、こっちだよー、おいでー」と言うと、こちらに来てくれる子どももいますが、もちろん、来てくれない子どももいます。「えー、あっちの方が楽しそうなんだけどー」と、こっちに来ないばかりか、逆方向へ走っていくこともあります。大人としては、呼んだらすぐに来て欲しいところですが、そんな大人の事情は、子どもにはなかなか伝わりません。

以前、教会学校の夏季キャンプ(敦賀教会ではなく)で、「おーい、こっちでご飯食べよー」と私が声をかけた小学生軍団は、蜘蛛の子を散らすように逃げ回り、危うく夕飯を食べ損ねるところでした。中学生のちょっとお兄さん達、お姉さん達に「そろそろ、ゲームの時間だから、こっちおいでー」と言って、しばらく待っていると、一人だけやってきて、「みんな部屋でゲームしている」と言いました。高校生のさらにお兄さん達に、お姉さん達に「遅いからこっち来て、もう寝なよー」と言うと、まあ、そういう年頃ということなのか、どうなのか。スタッフ総出で闇夜のキャンプ場を探し回り、複数ペアを厳重注意することになりました。そんなに自由にしたいなら、キャンプ来なきゃいいのに・・・、と内心思いましたが、でも、不自由なキャンプだからこそ、そういう行動がオモシロ楽しいんですよね、きっと。安全を管理するスタッフ側は気が気じゃありませんが、自分が参加する子どもの側なら、きっと似たようなことをしていました。

そういう子どもらしい様子と言うのは、今も昔も変わりません。イエス様の生きた時代の子ども達が特別、大人に従順で素直だったということはないでしょう。「子ども達をわたしのところに来させなさい」という4月の聖句は、イエス様の語った言葉ですが、この言葉には「イエスに触れていただくために、人々が子ども達を連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った」という事情背景がありました。つまり、話の分かる大人しか受け付けなかった弟子たちは、まだ分別のない子ども達を不適切と考え遠ざけようとした。しかし、そんな不寛容な弟子たちに対して、イエス様は「子ども達を来させなさい」と言われた。そういう展開です。でも、このイエス様の言葉を聴いて、本心から喜んだのは、子ども達自身ではなく、子ども達を連れて来た保護者の方だったと思います。「せっかく子どもを連れて来たのに・・・」という親の想いが強いですね。この4月の聖句は「すでに信仰を持っている大人が、幼い子ども達を招くイエス様の姿を見て、感動を感じるもの」だと言えます。結局、大人視点の聖句なのだということです。

ただ、この時、イエス様が招いた子ども達が、どんな様子だったのか、想像力を働かせて考えてみたいと思います。さっきも言ったように、イエス様と一緒にいたから「超絶良い子」とは限りません。母親に抱かれて泣きじゃくる子、遊びを中断され連れて来られて不機嫌な子。また、当時の中東地域ですから、乾燥する風土で外遊びをすれば、舞い上がる砂埃のために衣類や靴、と言うか草履は、きっと汚れてくすんでいたでしょう。また、ちょっと大きなお姉さん、お兄さんになると、イエス様のところに連れて来られて、恥ずかしいやら面倒くさいやら、色々思い巡らせたんじゃないかと想像します。要するに、決して、その場は、雅でもなければ、静かでも、厳かでもなかったということです。普通に賑やかで、普通に泣き声が聞こえ、普通に汚れていて、正直であり無垢な子ども達の怪訝な表情と生意気な態度が見え隠れしていたはずですよ。

でも、そんな子ども達を、イエス様は受け入れて、招いてくださった。良い子とか、悪い子とか。大人しい子とか、賑やかな子とか。従順な子とか、無遠慮な子とか。そういうことは全く関係なく、ただただ目の前のありのままの子ども達をイエス様は認めて、愛してくださった、と私は想像し、そう信じています。そういうイエス様の姿を「素敵やなあ」と思っています。

敦賀教会幼稚園の基本姿勢は、そんなイエス様に倣って「ありのままを愛する」ということです。「誰がなんと言おうと、君は大事で尊い!」という揺るぎない真実を、教職員一同、伝えて参りたいと思います。どうぞ、そんな敦賀教会幼稚園を、今年度もよろしくお願い致します。